

関係人口に見る、関係性のゆらぎ

横井豊彦[†]

Fluctuations in Relationships Seems in Relationship Population

YOKOI Toyohiko[†]

要旨

地域への愛着は、先行研究からは「特定の地域との間の情緒的な繋がり」と定義できる。したがって、愛着という概念を通して見れば、関係人口の「関係」は定住する、しないに係りなく持つことになる。一方、特定の地域への定住の理由として「結婚」が挙げられる。結婚においては、パートナーとの関係は常時変化があるが、結婚後に住む場所がパートナーの職業や実家の所在に依拠することもあり、そこで地域との繋がりも産まれうる。このため、特定の地域との関係、すなわち「愛着」が結婚後の年数やパートナーとの関係、更に年代によっても変化する可能性を示した。そして、その変化を「ゆらぎ」と表現した。

Abstract

Recent reports suggests that the concept of relationship population includes all the processes from having a relationship with a specific area to settling down. However, in a previous paper (Yokoi, 2022), we showed that it may take some time from the start of actual settlement to form a self-identity with the region and to feel psychologically that one has become a member of the region. This does not necessarily mean that the beginning of settlement will end the character of the relevant population.

In this paper, I would like to show the possibility of such “fluctuations” in the relationship occurring. Therefore, the possibility of dissolving the relationship with a specific region cannot be ruled out.

キーワード：関係人口，婚姻

Keywords：relationship population, marriage

[†] 大阪産業大学 スポーツ健康学部スポーツ健康学科教授

草稿提出日 11月17日

最終原稿提出日 1月10日

1. 序章

関係人口は「定住するまで」というイメージが強いが、地域に対する「愛着」は居住後も、変化をしていくと考えられる。

一方で関係人口が「定住」に至るきっかけは多岐に渡るであろうが、巷で取り上げられるような「地域への愛着」から移住するような例を除けば、「結婚」も大きな理由となるであろう。

そこでまず、愛着と結婚、移住についての過去の研究を概観してみたい。

1-1 愛着

地域への愛着は、様々な学術領域で定義がなされているが、ここでは「人々と特定の地域との間の情緒的な繋がり」⁽¹⁾と定義する。こういった愛着の形成には、地域の景観や住民との関わりが関係する⁽²⁾ほか、居住地に関する客観的な情報が増えることもこれに寄与する可能性がある⁽²⁾。要は自然環境などの物理的な要素と、慣習やしきたりのような社会的な要素がある。また、通勤途上などの、普段の移動時の景色もここには関係する⁽³⁾。

一方、特定の地方都市の住民を対象とした調査によると、転出入の理由は「結婚」「仕事」「親との同居または近居」「住宅購入」であるという⁽⁴⁾。

この事実を前提とすると、地域の側からの発信は必要であるが、地域に関係する人の多くは、地域発信のイベントに参加した人でなく、結婚や転勤、家庭の事情の変化に伴う人々が多い事になる。しかし、このような人々を対象とした検討は極めて少ないのが現状であるが、何らかのやむを得ない事情で地域に入った人の愛着の形成こそが、地域の、より多くの「ファン」を産む事に他ならないと考えられる。

1-2 結婚

結婚には地域差があるとされる。本邦の場合、都市部では結婚経験率が下がり、それよりも人口密度が低い都市近郊では更に下がるというデータがある⁽⁵⁾。その要因までは明確にされてはいないが、農村部より都市部では晩婚化が進んでおり、その都市部の近郊では更に晩婚の傾向がある事になる⁽⁵⁾。こうして考えを進めると、地域（ある程度の過疎地域）では、結婚は、その機会があれば比較的早婚だが、件数が少なく、少子化に繋がるという点で課題であると言える。

また都市部から、特定の地域への、結婚・転居を前提とすると、都市部の女性は「男性

の子どもに対する態度や意識」を相手の男性に求めるという。これは必ずしも育児への参加の有無は問わないが、男性にそうした意識があることは、魅力にも通じるという⁽⁶⁾。これらは主として結婚前の研究であるが、それを裏付ける結婚後、出産後の検討によれば、女性の意識は出産を経て、社会の中の自分から、母親としての自分に移行し、男性はその逆だという⁽⁷⁾。つまり、出産を契機として、男女で意識のベクトルが異なった方向に向かう可能性が示唆される。

こういった本邦の検討の多くは、女性の視点からのものも多いが、おそらく女性の社会進出や、育児に関係する姿勢の変化があるためと思われる。この点は、アメリカなど、海外とは異なり特徴的であることを明記しておきたい。

1-3 地方に移住する

地方に居住する動機は様々ある。災害被害地のように、インフラや人的資源が目に見えて足りない場合、その問題点と自身の生活目標を重ねると、当該地域へ「移住」する決め手になりそうであるが⁽⁸⁾、通常の就職、異動や婚姻の場合、家庭の事情や仕事の事情が優先されるため、類似例とは言い難い。また同様に、地域おこし協力隊の事例も、地域の課題解決と隊員の給与確保が定住の課題となり、定住する前提はあるのだが、その地域での仕事が発生する、しないに関わらず「住むこと」を前提とした、主として婚姻がきっかけとなる事例とは、やはり異なる背景となる。

概観すると、家族やパートナーの異動や引越しに伴う移住は、主体的に地域のファンとして移住する場合や、地域おこし協力隊としての移住と比較して「受け身」であるため、過去の研究が僅少である。その一方で実際の移住には、受け身と言える場合も多いと思われるため、これを看過は出来ないと考える。

1-4 問題意識と着眼点

本論文は、「関係人口」の概念について、婚姻を前提としたきっかけから、定住、やがて地域の一員となる、そのような「受け身」のプロセスに迫り、「実際に地域に入っていく」時に受容していく事柄の変遷がどのように変化するかに迫れればと考えている。

また、本稿で扱うデータは女性とした。女性、中でも「家族の異動、引越しについて」居住を始めた方/始める予定の方に限定し、主体的に自身の嗜好や職務がきっかけで居住を始めた方/始める予定の方は対象外とした。

「自ら意図した訳ではなく、家族やパートナーをきっかけに」、ある意味「受け身」で居住を始めた/始める予定の方の心情の変化を観察したいためである。

2. データ取得の方法について

本稿では、ある地域（定義上過疎地）在住歴約20年の女性1名と、同地域にUターンする男性と婚約し移住する前の女性1名に、それぞれ約1時間のインタビューを行った。質問を構造化はさせずに、地域とご自身との関わりを中心に進めた。

なお、インタビュー対象者から、年齢や勤務地などの詳細プロフィールは出さないで欲しいとの依頼があった。これに準じ大まかなプロフィールのみを示しておく、一人は地域在住歴20年以上で既婚、もう一人は現在婚約中の20代の方で今後移住予定、いずれも女性である。また、それ以上の情報は部分的なデータ以外は含み入れないように配慮を行う。そして、ヘルシンキ宣言の趣旨に則り、倫理的配慮として、インタビュー協力者である方には事前に調査の概要と目的、インタビュー当日に、取得したデータは研究目的以外には使用しないこと、個人情報を守秘され、プライバシーを侵害したり不利になったりするように使われることはないこと、インタビュー内容は録音し文字化してデータとすることを説明して、同意を得た。

3. 結果

地域での居住歴が20年以上となるA氏と、同じ地域で居住予定の男性と婚約し今後居住予定のB氏で、どちらも女性である。

3-1 これまで地域に居住してきた、A氏の述懐

私たちが嫁いできた頃は、まだ地域の因習も強くて、馴染むまで時間がかかりました。特に、インターネットのない時代ですから、事前の情報はなく、手探りでした。

習慣が異なる地域に馴染むのに時間がかかったことに加え、事前に情報を取得出来ないため、予期的な学習もままならない、当時の様子がわかる。インターネットの登場は、距離感を縮めた可能性がある。

相手のことをいいと思ったから、嫁いだものの、だからといって、その地域が好きになれなくなるわけではなく、まずはご両親や兄弟から馴染んでいく、と言う感じでした。これがおそらく現在だと先にインターネットや何かで地域の情報を入手でき

ますから、かなり違う気がします。

この内容からは、家族内に限定した情報は先に取り入れられるが、地域の習慣等は「習うよりも慣れる」ことが優先されており、現在とは様相が異なることが一層強調されている。更にはその頃の価値観に根差し、次のように述べている。

昔は、離婚して家に帰る事はタブー視されてきましたから、よほどのことがない限り、地域の慣習に従うことを余儀なくされたわけです。

離婚というものへの抵抗感が、現在より高かった頃にあっては、好むと好まざるに関わらず「家庭への適応、地域への適応」が求められたのであろう。

もしも、ある程度若い時に離婚していたら、坊さん憎けりゃ袈裟まで憎い、となりかねないと思います。でも、今の時代なら、こんな感じじゃないのでは、と思います。

この内容からは、少なくとも当時は「人と、その地域が一体化して捉えられていた」ということである。つまり、特定の地域の誰某と言うように、個人のアイデンティティを捉える上で、その人の出身地や居住地が、セットとして紐ついていた、とも言えよう。それを裏付けるように続けた。

昔の人は、現在のように、インターネット等の情報がないですから、その分だけ世界観が狭いともいえます。だからこそ、外部から地域に入ると、より一層地域の慣習を強く感じますし、地域の人も外部の事は、知らないがために、初めて地域の外から嫁いできたような人に会うと、こいつ何者や、と言う感じで構えてきたのでしょうか。

ここでは、情報の非対称（地域内と地域外の間）が、地域内の人にとっても大きかった可能性を示唆する。受け入れる側から見れば、地域外の情報が多く、個別に対応するというよりは、地域外のものに対して一定に近い「異分子」としての対応をしていたのではないかと、考えられる。

3-2 これから地域へと嫁ぐB氏の述懐

B氏は、これから結婚しようとする相手から、出身地域のことを聞かされた。B氏自身は政令都市圏の出身であり、その地域に関しては「田舎だなあ」というのが、当初抱いたイメージであるという。そして初めて現地に行った時の感想を次のように述べた。

地域の事は前からうっすら知っていましたが、実際にお付き合いをするようになって、訪問すると、前に持っていた印象と、リアルの印象はかなり違います。

見ると聞くとは大違いというが、実際に現地へ赴くと、想像以上に現地の家族や近所の人の歓待を受けたという。そこに大きな、想像と現実の違いがあったという。

もちろん、彼の生まれた場所だから、そういう思い入れはあるわけですが、ソレだけとしたら、もし彼と別れたらその場所も嫌いになるかもしれません。でも自分が、ある程度事前学習をしたように、現地の方も事前学習をしてくれていたみたいで、ある程度こちらのことを知った上で受け入れようとしてくれていることに、ある種の感動さえ覚えた訳です。

事前にお互いの出自の地域のことを学習する機会、多くはインターネットであるが、が極めて重要な役割を果たしていると見て取れる。同時に、自分が好きになった人だから、その人が育った地域のことも好きでいたいと思う、そのような一体化した感情がありつつも、「それだけではない」と述べている。「それだけではない」訳を次のように表現している。

しかし、先に地域のことを知っておくと、別に場所に対する感情が湧くので、その部分は、あまり変化しないと思います。

このことは、個人に紐ついた「地域」ではなく、その地域を捉えていけることを意味する。背景としては、インターネットが普及し、以前よりも、地域の情報へのアクセスが容易になり、「見知らぬ地域と、その出身者」という互いに紐ついた関係性が、「地域」と「人」それぞれで捉えることが可能となった、ということであろう。また、B氏は次のようにも捉えている。

事前に、情報が得られるので、その点は、地域の人も同様なので、お互いに自分の

住んでいる地域よりも、少し広い視野でものを捉えられるので、初めて会ったときの、抵抗感が少ないのではないのでしょうか。

このことは、以前に比し、地域内外の情報の非対称が減じられていることを示唆する。加えて、無意識のうちに「調べあう」為に、初対面の時の距離感も減じられるということであろう。こういったことを述べ、最後に結んだ。

だからと言うわけではないですが、もし相手と別れることになっても、その地域の自然や風土を嫌いになる、と言う事は無い気がします。

このことは、当初から、地域と人が、それぞれ独立した存在であることを示す。また、パートナーとの別離を想定した場合の話題を出せること自体が、離婚がタブー視されていた時代とは、かなり異なった価値観であることを示している。

4. 考察と研究の限界

4-1 インターネットがもたらした、情報の非対称性の緩和

両氏のインタビュー中、度々登場する単語がインターネットである。これが存在しなかった時代のことは「思い出した」述懐となるが、事前に情報が手軽には得難かったものと思われる。実際にA氏は「インターネットがあれば」という述懐をしており、B氏の話からは事前情報が得られるのは、地域の人々にとっても同様なため、お互いに少し抵抗を減じた状態で対面できるもの、と推察される。このことは既存の研究で述べられておらず、当然のこととされているか、見過ごされている可能性がある。

4-2 愛着という概念の変化

愛着という概念は「人々と特定の地域との間の情緒的な繋がり」⁽¹⁾とされ、大きく変わってはいないように、一見される。しかし個人間の関係性が崩れた場合に、A氏からは「坊さん憎けりゃ袈裟まで憎い」、つまりある人のことを嫌いになってしまえば、その人の出身地さえ嫌いになってしまう可能性が示唆された。それに対してB氏の言葉からは、仮に離婚するような関係になっても、相手個人を嫌いになることと、その出身地の地域を嫌いになることとは別ではないかとの内容が得られた。

この両者を対比すると、地域と人々の情緒的な繋がりを媒介する、個人的な人間関係が、

変化してきていることが見て取れる。

4-3 個人同士の関係と、個人と地域の関係の分離

B氏の言葉には「仮に離婚することになっても」、地域のことは別に捉えられるだろう、とあったが、A氏の言葉には「坊さん憎けりゃ袈裟まで憎い」と個人間の感情が地域へ抱く愛着と強く結びつく可能性がみられた。インタビューの範囲からは、これらを「事前の情報量」が媒介している可能性が示唆された、と考えられる。と言うのも、インターネットがなくとも図書や新聞、テレビなどを介した情報収集は可能ではあるが、インターネットの情報量の多さと個人的な解釈の共有による予期的な革新との差は、かなりに開きがあると思われるからである。

4-4 結婚についての価値観の変化

結婚についての価値観の変化は、男性側のインタビューを得ていないため、そちらは過去の研究に依存せざるを得ず、その点の限界は否めない。

ただし、本稿だとA氏の言葉からは、かつては「離婚が恥」とされていて、仮に離婚したくなるような困難があっても耐えて結婚を持続しようとした時代の価値観があったものと示唆され、B氏の言葉からは離婚を想定するものではないが、無理してまで結婚を継続はしない、それが故に「もし離婚したら……」という発言に端緒が出たものと考えられる。

先行研究にあるように、結婚は地域性を有する。加えて地域の場合、その地域が「どの程度過疎か」「大都市との距離はどのくらいか」といった条件があると、先行研究からは示唆されるが、本稿での地域は政令指定都市には数時間、地方都市には1時間以内、高齢人口比率は上昇中という地域である。このことを前提として、文献的には「結婚年齢は若くないが、その機会に課題がある」とまとめた。

加えて「育児参加はしなくても、男性にその意識を求める」のがB氏の世代であり、A氏の結婚当時の男性は、先行研究にあるように「結婚、出産を契機に仕事に没入しよう」とする色合いが強かったものと推察される。

したがって、両者とも結婚を前提とした移住ではあるが、主にインターネットアクセス媒体による個人の事前学習の度合い（この点は受け入れる側にもいえる）の違いと、「無理をしない」という価値観（換言すれば、その為にはパートナーとの価値観のすり合わせが、以前より深度をもって行われていると思われる）が、強く反映されていると思われる。

つまり、結婚を介して地域を概観すると、情報量と結婚観の変化という要素が、変化を媒介していると示唆される。この結婚観の変化は、地域性の有無は分からないものの、少

なくとも「男性の家庭への参加度」に関連しそうではある。というのもA氏の結婚した頃は、女性が家庭を守り男性が外で働くことが一般的な年代であり、それに対して割に最近の研究からは異なる男性像が読み取れるからである。

4-5 関係人口としての整理

定住するまでを関係人口と称するなら、A氏は定住人口、B氏は（まだ）関係人口である。しかし、地域に居住することで、地域の慣習や自然とも対峙することになる。それら個々の要素には、好き嫌いの面で濃淡が生じると思われるし、また経時的な変化を伴うであろう。個人とそういった地域の要素の繋がりは居住後も続く。

このように考えれば、その関係性は永続的なものであり、言葉の上では訪問人口と定住人口となどにした方が、どちらも地域の変革を起こしうる要素として、捉えやすいのではないかと考える。居住する場合は、地域の慣習や自然と近接するが、何かの要素を失ったり、それまで別の地域で暮らしてきた事実も変化しない。だからこそ、地域との関係は、「深く」なると思われるが、それを好む、好まざるという面と、距離感の取り方は個人に依存するからである。

4-6 「ゆらぎ」について

本稿で取り上げた、A氏、B氏のように、結婚前後での（機会があれば、その後の出産前後でも）パートナーとの関係は変化する。先行研究にあるように、結婚当初から抱いているイメージもあれば、結婚後に家庭内でできるイメージもあるであろう。

この流れとは別に、世俗的な価値観の変化がある。本稿で示したような結婚に対する価値観の変化もそれにあたるし、法律（例えば雇用機会均等法や子育て支援法案）に伴う変化もそれにあたる。更にはここに、情報量の多寡が加わる。インターネットの普及で情報量は増えたが、読み手の選好性が、その選択を媒介し、ある面で個人の価値観を形作りやすくなっている。

だから以前よりも、地域に入る際の抵抗感は薄れている、とB氏の事例からはいえる面があるが、一方で情報の選好性によって、自身にとって都合よく見える情報ばかり得ると、実際に地域に入った時に別の要素と対峙し難くなる可能性も有する。実務的には、多分論文例にはならないだろうが、地域おこし協力隊の失敗などに該当例が予想されるほか、本稿で扱ったような結婚でも失敗例はあるであろう。

その背景には、こういった「揺らぎ」があり、それを予期的に直視しておくことが、実際の移住例では一助となると考える。

5. 結語

関係人口には「ゆらぎ」があり、それは居住後も続くと思われる。したがって、移住したからといって、関係人口としての性質を失うわけではない。

謝辞

本稿はインタビューを受けてくれた方、文中には出せないものの、ある地域の方々にはお世話になりました。御礼申し上げます。また本稿は、大阪産業大学学内研究組織の援助のもと、研究を遂行できました。重ねて御礼申し上げます。

参考文献

- (1) Brown, B., Perkins, D., Brown, G.: Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis, *Journal of Environmental Psychology*, 23, pp.259-271, 2003.
- (2) 槇野光聰・添田昌志・大野隆造 (2001) 「地域に関する情報が居住地への愛着形成に与える影響」, 『日本建築学界大会学術講演梗概集』 pp.769-770.
- (3) 萩原剛・藤井聡 (2005) 「交通行動が地域愛着に与える影響」『土木計画学建久講演集』.
- (4) 清水陽子・中山徹・土佐野美裕 (2017) 「若年層の転居理由別に見た居住地選択要因に関する研究 奈良市からの転出入者を対象とした調査より」『日本建築学会計画系論文集』 pp.423-432.
- (5) 北村行信・宮崎毅 (2009) 「結婚の地域格差と結婚促進策」『日本経済研究』 No60, pp.79-102.
- (6) 府中明子 (2016) 「恋愛結婚の条件」『家族研究年報』 41巻0号, pp.41-57.
- (7) 小野寺敦子 (2005) 「親になることにともなう夫婦関係の変化」『発達心理学研究』 16巻1号, pp.15-25.
- (8) 鈴木勇ら (2023) 「東日本被災地における若者のライフコース」『未来共創』 10巻, pp.2-41.